

土屋北彦著

『大分県の民話』 1・2集

一年程前かに大分県の民話1集を出した土屋北彦さんは、続いて今度大分県の民話2集を出された。こんど出された2集の巻末によるとどうやら3集の用意もあるらしい。このぼう大な仕事をしはじめてからの位の時間を経ているのか、生業を別に持つ人である彼がどんな具合にこれをやりおうせたのであろうか。一度聞いてみたい気がする。

私事になるが、北彦さんは私などと同世代の人で、同じ田舎の生れなのだけれども私などが既に失ってしまった、あるいは失おうと努力しているものを逆に身深くとりこめて、そこを足場にして自分を築こうと努力している人であると私は思っている。

もっと言えば北彦さんの中には田舎のいろりばたのじっさま（といっても私などもうとくにその実感を失ってしまっているのだが）が生きて動いている感じがする。北彦さんの渋味のかった盆唄や歌、口説な

どを聞いたことのある人なら誰でもそう思うに違いない。古い村に行くとき大抵いい村の古老・歴史家・北彦さんは、その系譜を生きた最後の人の一人ではあるまいか。

1集が出たとき、賛否両論がたたかわされ、否定論の中心が採集地や引用書目、伝承者などを記していないところにあつたと聞いている。しかし私は以上のような意味からいって、北彦さんの本はいうところの民話採集書ではないと思うので、その批難は的はずれではなからうかと考えている。

もちろん北彦さんはいろいろもろもろの人と会って話を聞き採集されたであろうけれども、そしてそれを2集の巻末でいわれているように3集の巻末につけることもよいことだと思ふけれども、それらと声をかさねて北彦さん自身が御自分の永年の記録・記憶をたぐりよせて書いたものとして十分価値があるのではないかという気持が私には強くある。

学問の対象・被調査物として、いえば第三者として冷静にそれをつき放して採集、分類・検討等をするといったやり方は北彦さんの満足するところにならない。それとは別のものとして、北彦さんが語り口に一枚

加わっているところをこの書の価値としてむしろ積極的に評価すべきだと思ふからである。もちろんそれは北彦さんの体臭がより濃く入りこんでいるということでもあるわけで、この点から表題『大分県の民話』は客観的分析的な意味でのそれよりも北彦的偏向を伴ったものと覚悟してかかる必要がある。

くりかえすが、大分県にはつきものの吉田六はなしを採らず、その下地をなす話のいくつかを採ることですませていくことや寺や神社や支配者周辺にまつわる話が多く、そこに北彦さんの面目躍如たるものが感じられるなどの諸点がこの本の特徴であり北彦的偏向の極であると私は考える。

言うまでもないが、前近代社会で民衆に對して占める神社・寺・殿様の位置は大きい。従ってそれが話の軸にしばしばなつたとしても少しも怪しむにたりないわけだ。が、民話が民話として支配者の文化と異った価値を主張しうるのは、神社や寺や殿様のはなしにしても、そこに生産に直結した生活者としての発想・論理が支配者の論理と対極をなしつつ貫かれていればこそである。私が北彦さんの本に喰いたりなさを感

じたのは民衆が神社や寺や殿様の話を通して何を語り訴えようとしたのかについて追求不足の点においてであった。少くとも再話をされる時にはこの点をもっと激しく求めてみるべきではなかったらうか。

それと重って今一つ、北彦さんが民話を「民族の魂のすみか」と考えられ、それを「各時代の横にひろがる変化の相でなく、縦につながる軸のような源流」として扱われていることについて。

確かに民話は底辺の文学、文学の根であって、時代の変化をまっ先にこうむりやすい個性的文学とは違つて変化は緩慢であるしかし、それは変化がまるでなく凝固しているというものではない。中世が民話の季節であったことは研究者の指摘するところである。つまり大へんゆるやかだけれども民話もその特定の時代の影響下で変化するもので、いつの時代、誰達がその話をふくらませたか、あるいはしばませる役割をもつたかを問題にしなければならぬと思う。この点でさういふ話の変化、担い手の歴史的質にあまり興味を示さず「民族の魂」とか「庶民の精神」といったことばで一括される北彦さんに私は（私も北彦さんと同じ

様に庶民派をもつて任じているのだが）異和感を覚えてならない。

「民族の心」「伝統」北彦さんも私も競争体験を持つ者だから、これら一連のことに見覚えがあるし、うらみつらみを抱いている一味だと言える。もちろんそれと北彦さんのとは似ても似つかぬ内容のものであろう。しかし同時にそれが両刃の剣であることにもっとおそれを持ってよいのではなからうか。ついででは言えば庶民派の北彦さんは「庶民の労働と智慧とが、常に時代を支え動かして来た」「芸術創造の世界においても例外ではない」と言われる（私も根本的には賛成するものだが）が同時に民衆が芸術の根をつくり出しながらそれ自身の文化をつくり出すことを拒まれ逆に彼らのつくり出した芸術の根を収奪加工することとてつくり出した支配者の文化に強く金縛りになっていた面も見ないわけにはいかないのではないか。北彦さんの庶民を愛し、農村に密着されている姿の中にちらっと農本主義者の郷土愛をみつけるのは私のひがめであるか。

ともかく民族とか伝統とかいう重く重いもの、しかもすばすばと捨てて行くとい

ずれ遠くないうちに手痛い仕かえしにあらうこと請合いのものに取り組む以上そうそううまくばかり行くわけがない。より優れた仕事を第三集で示して下さることを期待する。

（県民文化会議刊第1・2集各三五〇円）

編集後記

○第七号をお送りします。今度の号は昨年の総会の時の報告をまとめていただいたものを主としました。（佐藤一恵さんと古庄のは紙面の都合上省きました。）困語教育の現場の問題がたくさん出されているわけですから、それぞれ御自身の実践とからみあわせて質問・反論があつて然るべきだと考えます。この雑誌は偉い論を伺うためのものではなくて、会員の研究や意見を交流させる場として出されたものですから十分活用して下さいを希望します。

○この号で本学非常勤講師、梅紅女学院教授佐藤泰正氏に御執筆おねがいました。氏の近著『近代日本文学とキリスト教・試論』は高評されているもの。そこでも取上げられています。宮沢賢治は氏の一貫して取組んでいられるもので、きつと私たちの心を開いてくれるものと確信します。○月報に御意見をお寄せ下さるのをお待ちします。（古庄記）